

菅  
虎  
雄

夏  
日  
君  
の  
書  
簡



# 夏目君の書簡



夏目君の書簡といつて今私はあまりたくさん所持して  
いない。これは極く親しかったため、生前その書簡もそ  
んなに大切にせず保存もしておかなかつたためである。  
これは何も私に限つたことではなく、元満鉄総裁の中村  
是公氏なども同様で、嘗て第一回の漱石全集を刊行する  
時書簡を貸してくれるよう頼まれた際、しらべて見たら  
殆んどなかつたよと云つておられたが、親しかつたため  
その書簡もそんなに丁寧に扱わなかつたためである。

元来夏目君は大学卒業後しばらく私の家に同居しており、この後も私の紹介で伝通院の隣りの法蔵院という寺に移られた。それからしばらくして私が熊本の高等学校に行っている際、当時松山中学へ行っていた夏目君からいろいろ不平を述べた書簡を貰った。当時熊本高等学校の校長は中川元氏で、その中川校長が熊本高等学校に英語の教師がほしいがというような話をされたので、そんならと云って夏目君の話をし明治二十九年の春熊本へ来るようになった。この時も家が定まるまで二三ヶ月私の家に同居しておられた。こういう風に極く親しくしてい

たので、夏目君の書簡はかなりたくさん貰ったものであるがあまり保存してないようなわけである。

なお明治四十年四月大学を辞されて朝日新聞社へ入り、最初の連載小説「虞美人草」の取材旁々京都へ来られた時は当時京都の第三高等学校にいた私と一緒に叡山へ登ったりその他方々を一緒に歩るいたものである。それから東京へ帰られて本郷西片町の家で「虞美人草」を執筆されている際もいろいろ書簡を貰ったものである。又松根東洋城氏の御両親の墓銘を書くように頼まれた書簡や、鎌倉の釈宗演老師に満州へ教化に行つて貰うよう

に願ってくれと頼まれた書簡などいろいろあるが、それらの書簡は皆筆まめに要領よく書いている。実際夏目君は筆まめで又筆が極く早かつたものである。

次にこれは学生時代のことであるが、ある時夏目君がどうも自分は胸が悪いのじゃないかと心配だから北里柴三郎氏に診て貰いたいと思うが一人で行くのは何だから君一緒に行ってくれないかとのことで、当時北里氏は多分芝山内に居られたと思うが、その北里氏のところへ一緒に行ったことがある。その時の診断は胸の方は一向別状はないとのことであつたが、今から想像すると実は胸



の病気ではなくて胃潰瘍でも悪くてそのため血でも吐かれそれを考え違いされて心配されたのではないかとも思う。なお京都へ来て一緒に叡山へ登った時も途中で胃が痛み出し、しばらく休んでから峠の茶屋で湯を飲んで直ったこともあったが、胃潰瘍は単に晩年に始まったものでなく、ずっと以前学生時代から悪かったのではないかと考えられるのである。

それからこれは他の誰も知らぬ事実で、夏目君が横浜のメールの記者になろうとした事がある。その頃メールに頭本貞氏などが関係していたが、私が中へ立って、

夏目君の確か日本の宗教を論じた大版十枚程の英文を送った事がある。併しそれはやめになったが、以て同君がもとから、何かしら筆で立とうと思っていた事が解る。もしあの時メール社に入っていたら、その後どうなっていたらう。

その頃から骨董に興味があったし、俳句は勿論漢詩も作っただらしい。同君はもとより江戸っ子で、頼まれるとどこまでも親切に世話をする風があった。感じ方の鋭どい事は昔もその頃も変りはなく、こちらで云った事が、一言一言すぐ目に見えて反応を起すと云う風であった。

その頃の親友で今樺太中学校長をしている太田達人君や死んだ形而上学者の米山保三郎君などと、紀元会と云うものを起して、夏目君もその一員だった。傑物の米山君は早く死んで、夏目君がその伝記を書く筈であったが、それも果さずに逝って了った。

洋行の時連名で貰った書簡は狩野君の許にあるかも知れない。それから私が京都にいた時代に、朝日新聞へ入りがけの夏目君から、二万円かを持って迎えに来てくれると云うような面白い書簡を貰った事もある。又亡くなられる少し前に夏目君のところから、ある刻印を手に入

れたから、その字を読んでくれと頼まれ、それを見たところ「版權許可之印」というので大笑いをした事もある。(談)





日本文学電子図書館

---

夏目君の書簡

著 者：菅 虎雄

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館